

夜明けのすべて

瀬尾まいこ

今年の読書運動のテーマは「希望」。わたしがその言葉から連想するのは、キラキラ！明るい！といったものではなく、闇の中にぼんやり見える灯り、みたいなイメージです。希望が叶うかどうか、叶ったところでハッピーになれるかはわからないけれど、とにかく今生きていくためには必要なもの。そんなイメージに近い本を今回は紹介します。月に一度のPMSでものすごくイライラしてしまう藤沢さん。職場の人はそれを知っていて優しく助けてくれるけど、気にしない性格。そこに転職してきた山添君は、やる気がなさそうな青年。でもそれは性格ではなく、パニック障害だったからなのでした。職場には公表していなかったけれど、パニックを起こしたことで藤沢さんは気づきます。それから、おせっかいともいえる2人の関わりが始まって。パニックになる時の心理状態や、PMSでイライラが募って怒りを爆発させてしまう時の気持ちが丁寧に描かれていて、どんな風に追い込まれていくかがよくわかる気がします。本当ならもっと明るいのに、もっと仕事もできるのに、体がいうことを聞かない。経験したことがない人には説明も難しいし、まずその話ができるほど心を許しているか、という問題もあります。人に助けを求めるのって結構難しいよなぁ、と私も考えながら読みました。頼っていいのかわからないし、何をどうやって助けてもらえばいいのか、自分ではわからないこともあります。普通に過ごしたいと思っているだけなのに、うまくできず葛藤する姿がリアルです。ある時、映画を観た藤沢さんは「誰かに伝えたい！」という一心で、山添君に会いに行きます。その後、映画館に行けない山添君のために、ある方法で映画を楽しむのですが、それがなかなか楽しそう！病気だから何もできない、と諦めるのではなく、工夫すれば楽しく過ごせることに気がついた2人を見て、私もうれしくなりました。ところで、社会学には「Weak Ties」という考え方があるそうです。直訳で「緩やかなつながり」。頻繁には会わないけれど、尊敬し信頼する人との細く長い関係のこと。元は就職に関する実証実験から示された概念ですが、日常においても当てはまるのではないかと思います。違うコミュニティにいる人こそ、思いがけないタイミングでアドバイスをくれたり、知らないことを教えてくれたり。思い浮かぶ人はいますか？きっとこれからいろんな人に会ううちに、そういう存在にも出会えるんじゃないかなぁと思います。PMSやパニック障害に限らず、しんどいことは誰にでも訪れます。自分には関係ないと思っても、今はたまたまそうじゃないだけ。日頃からいろんなことに気づけるようにしたい、と改めて思いました。希望は人それぞれ違うもの。自分で探さなければ見つかりません。友達との時間も大切にしながら、それぞれの希望の種を図書館でも探してもらえたらいいなと願っています。

瀬尾まいこ

1974年大阪府生まれ。大谷女子大学文学部国文学科卒業。
2021年『卵の緒』で坊っちゃん文学賞大賞受賞、翌年作家デビュー。
2005年『幸福な食卓』で吉川英治文学新人賞、
2008年『戸村飯店 青春100連発』で坪田譲治文学賞、
2019年『そして、バトンは渡された』で本屋大賞を受賞。